

水と文学 (6)



前東京都水道局理事 小泉 智和

平成12年夏、赤川正和都水道局長（当時：現日本水道協会専務理事）が21世紀東京新聞フォーラム「玉川上水ー21世紀への水脈」にパネリストとして出席する事になりました。

コーディネーターは東京新聞編集委員伊藤章治氏、パネリストは赤川氏の他、作家稲葉真弓氏、水みち研究会代表神谷博氏、NPO多摩川センター副代表山道省三氏です。

神谷氏と山道氏については、これまでの活動や著作から、彼等が何を意見するか概ね予想出来ました。わからないのは、稲葉氏です。

そこで、私が赤川氏に情報を入れるべく、図書館から何冊かの彼女の著作を借りてきました。

読むほどに、驚くほど彼女が水への想いが強い事を知らされました。

身近な、生活に密着した水への想いで

す。想いは川であったり、蛇口、湯船、シャワー、噴水、排水溝等などであったりします。彼女は、そこに音を聴き、色を浮かべるのです。

○ 稲葉真弓のプロフィール

稲葉真弓は、昭和25年3月愛知県に生まれました。今年53歳になる気鋭の作家です。県立津島高校（明治33年<1900>開校の伝統校）卒業。名古屋のデザイン事務所に勤務しますが、転勤で上京してきます。

名古屋では、詩ばかり書いていましたが、東京に来てからは散文を書きはじめます。彼女は語ります、「東京という巨大な街のエネルギーに刺激されて、“いまここにいる自分を表現したい”」という思いからであったと。

昭和48年、23歳の時「蒼い影の傷みを」で女流新人賞。同55年「ホテルザンビア」で作品賞、平成4年「エンドレス・ワルツ」で女流文学賞、同7年「声の娼婦」で平林たい子文学賞を受賞しています。

他に、著書として、「琥珀の町」、「抱かれる」、「森の時代」、「ガラスの愛」、「水の中のザクロ」等があります。

彼女の作品の中では、拾ってきた一匹の野良猫との20年間の生活を描いた、愛猫家ならきっと感激する「ミーのいない

朝」や若手作家らしくインターネット配信をした「花響（はなゆら）」、詩集「母音の川」等が特筆されます。

彼女の作品で、水を描く場面が多いのは、彼女の生家近くには木曽川から引いた農業用水が流れ、又上京してからも、江戸川、多摩川、目黒川と、いつも川のそばで生活している原体験によるからでしょう。



稲葉真弓さん

○ 「森の時代」に描かれた下水道

「森の時代」は、平成8年、朝日新聞社から出版されました。この本では、異性装症（女装者）の三輪誠が勤務する地下の雨水貯留場や女装する男たちの溜まり場等が描かれています。

「彼は、顔を鏡に近づけて最後の点検をする。口紅が濃すぎはしないか、ファンデーションがむらになっていないか、アイラインが瞼からはみだしていないか。それから彼はゆっくりと鏡を離れる。完璧な化身だった。ブルゾンのポケットには、いつものように札を何枚かと小さなカセットテープ、耳にはイヤホンをつっ込む。

外は六月の湿った風が吹いている。彼は微笑する。もうすぐ雨季だ。誠はこの季節が、なぜかどの季節よりも好きだ。雨と水、湿ったコンクリートの匂い……。神殿が一番神殿らしくなる水の季節だ。」

そんな女装をして出かける誠は、普段は都指定の水道工事会社に勤めて、彼が美しい神殿と呼ぶ、貯留場の管理の仕事をしています。

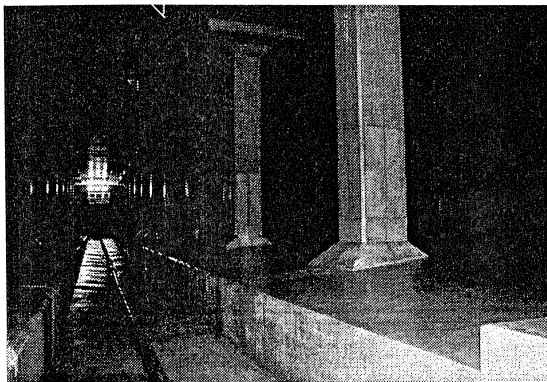
「ここは貯留場というよりも、ごみの集積場と言ったほうが正しいかもしれない。地上にあふれた水は、排水溝を通して、この地下の巨大なコンクリートの箱に様々な物体を運び込んできた。雨の翌日には、地下の貯留場を満たし。どこからともなく運ばれてきたごみで表面が埋まるのだ。雨が続けば水位もごみも増え、一旦雨が上がればごみをせきとめる柵には背丈ほどの量の膨大な汚物がひっかかっている。それを鋤ですくいごみの袋に押し込む時、誠はなんだか、汚物処理係になったような気分になるのだ。ティッシュペーパーのかたまり、ゴム草履、すいかの皮、膨れ上がった文庫本も、女物の靴、男物の靴、おびただしい煙草の吸殻、コンドーム、インスタントラーメン用の発泡スチロールの器、トランクス、パンティ、新聞、清涼飲料水の缶や瓶、猫の死骸、弁当の容器、台所用のスポンジ、トイレの洗剤の容器、文字のにじんだ手紙や書類、自転車のベル、かまぼこの板、ニクノ粒、ベレー帽……ありとあらゆるものが柵の前には山積になる。」

私は、この本を読み終えて、ふっと、

思いました。

ひとつは、貯留場管理を請け負っている水道工事会社の事がかなり描かれていることで、思うに、作者は作品の舞台となっている雨水貯留場へ見学に行き、そこで会社の人から色々と話を伺ったのでしょう。都市の恥部を見て愕然としたと思います。エコロジー団体の人と行ったのかもしれませんが。冒頭のフォーラムにパネリストとして出席して来たのも、このような経過からかもしれません。

今ひとつは、彼女は、この著作の中で、私たちが余り知りえない男の女装者達の世界を好意的に描いています。思うに、煙草をくゆらし、酒を好む彼女には、性の倒錯・男の性への願望があるのかもしれませんが。否、彼女の心底には、生まれついて男・女と決められてしまう事への不条理を感じているのかもしれませんが。



雨水貯留場目

○ フォーラムでの水への想い

多くの参加者を集めたフォーラムで、赤川氏は、「多摩川の最上流で、水道局のごみ拾いに参加した。水道の水源の

大もとの所に、とても口では言えないようなごみが本当にたくさんあった。“なんで、わざわざ車で捨てに来るのか”。怒りが悲しみに変わった。……一人ひとりが自然を護る、社会秩序の最低限を護る、ということをしなくてはいけない。」と訴えます。

一方、稲葉真弓は、「国木田独歩の“武蔵野”を読み返した。時雨のシーンが出てくる。時雨がパラパラと雑木林の中を過ぎていく。木の葉が鳴り、滴が大地にしみ込んでいく。大地の本来の有機的な姿が、ありありと浮かび上がってくる。失われたものも読み取ることができる。私たちの課題は、この失われた美しさを追想するのではなく、取り戻す歩みを始めること。私は、この時雨の音を、今日から忘れないようにしたい。」と語り告げます。

* 「水と文学」第2回でご紹介した黒岩重吾氏（直木賞作家・水道産業新聞社初代編集長）が、去る3月7日、肝不全のため逝去されました。79歳でした。この誌をお借りしてご冥福をお祈りいたします。（筆者）